

ケルト修道院文化に関する一考察

— 聖コルムキルの生涯と『ケルズの書』 —

吉津成久

Abstract: The facsimile edition of *The Book of Kells* produced by Faksimile Verlag, Lucerne, Switzerland in 1990 has been owned by the library of Baiko Gakuin University. The writer of this paper has been writing the papers on the significance of *The Book of Kells* with reference to Irish literature referring to the facsimile edition and the accompanying volume of commentary which lie ready to hand. This paper traces back the whole life of St. Columcille (St. Columba in Latin) from his birth in Donegal, Ireland, in 521, his missions grown out of his foundation of two monasteries at Kells in Ireland and the island of Iona in Scotland to his death at the island in 597, and discusses mainly the significance of the roles he played as the founder of Celtic monasticism including the accounts of *The Book of Kells* which in the middle ages was revered at Kells as the great gospel book of Columcille. In addition, St. Columcille's Monastery & Church and Grounds are presented and illustrated together with the photographs taken by the writer himself in addition to a road map.

Keywords: St. Columcille *The Book of Kells* Iona Celtic monasticism

1. はじめに

1990年に発刊された四福音書装飾写本『ケルズの書』(9世紀)の完全復刻版が梅光学院大学図書館に所蔵されている。本論文の筆者は、これまで、手許にあるこの復刻版とその付録である注釈書を基本資料として、アイルランド文学との関わりにおける『ケルズの書』の重要な意義について論文を執筆してきた。本論文は、まず『ケルズの書』の生みの親である聖コルムキル(ラテン語では聖コロンバ)の全生涯を辿る。彼はアイルランドのドニゴール州で521年誕生し、アイルランドのケルズとスコットランドのアイオナ島に修道院を創建し、一生伝道活動に尽くした。そして、

597年アイオナ島で76年の生涯を閉じた。その足跡から、ケルト系修道院の創設とその発展のために、また、中世における最高の福音書写本『ケルズの書』作成のために果たした聖コルムキルの役割の重要な意義について論考する。さらに、アイルランド北東部ミース州の片田舎ケルズに6世紀以来存在する聖コルムキル修道院の全貌とその存在意義を、筆写撮影の写真と地図を補助資料として、論述する。

2. 聖コルムキルの生涯

聖コルムキル (St Columcille) (アイルランド語で「鳩の教会」を意味し、ラテン語で「鳩」を意味するコロンバ (Columba) にあたる) は、521年アイルランド北部ドネゴール州 (County Donegal) ガルタン (Gartan) で生まれた。当時のドネゴールは、「ニアルと9人の捕虜」(Niall of the Nine Hostages) と呼ばれる一族が建国したウイ・ネール (Uí Néill) 王国の領土で、コルムキルはニアルの5代目であった。したがって、聖コルムキルはまさにケルトのプリンスであった。しかし彼は幼い時からキリスト教による帝王教育を受け、様々な書物に通じ、自分の時間の多くを「祈り」にささげ、修道士の道を進むべく学びに没頭した。当時は、高貴な者の子息を養子に出す古代ケルト社会の慣習が守られており、コルムキルは聖職者を里親としたことが、彼を神の道へ向かわしめたのである。彼はミース州 (Co Meath) のクロナード修道院 (The Monastery of Clonard) の聖フィニアン (St Finian) の下で修業し、543年、大飢饉で師のフィニアンが亡くなった後、故郷アルスター地方に帰って、デリー (Derry) に最初の修道院を建設し、さらに、546年にダロウ修道院を建設した。そして、553年頃、ミース州のケルズ (Kells) に修道院を創建した。ここは古代王家の砦であったが、タラの上王ダーモッド・マッカロル (Diarmuid MacCaroll) から550年頃聖コルムキルに授与された。聖コルムキルは、563年、42歳の時スコットランドへ発つまで、約10年間ケルズに留まっていたが、その間、自分の良き友人で尊敬するモウヴィル修道院 (The Monastery of Moville) の聖フィニアン (St Finian。クロナード修道院の聖フィニアンとは別人物) から1冊の書籍を借りたことがあった。彼はその本に大層魅了され、自分自身のためにコピーすることを決めた。そして、聖フィニアンがそのコピーを発見し、これは自分の修道院に所有権があることを主張した。聖コルムキルはコピーは自分によるものだからあくまでも自分のものだと主張したが、決着がつかず、裁定はタラの上王ダーモッド・マッカロルに委ねられた。ダーモッドは聖フィニアンの言い分を受け入れ、「どんな子牛もその母牛のものであり、どんなコピーもその元の本のもの」(“To every cow its calf, and to every

book its copy.”) と宣言した。これはまさに著作権をめぐる最初の裁判であったといえる。

聖コルムキルは気が動転して故郷のガルタンに帰った。そして、彼の一族がコルムキルの主張を支持して軍を招集した。この報せがダーモッド上王のもとにとどけられた。上王は自分の軍隊を北方へさしむけて、両軍は560年スライゴ州 (Co Sligo) で相まみえ、コルムキル側が勝利をおさめた。しかし、聖コルムキルは自分の勝利を喜べなかった。むしろ自分が原因で招いた戦だったから良心の咎めに苛まれた。何しろ自分は良き友聖フィニアンを裏切り、自分が原因で多くの人々を死に追いやったのだから。そこで聖コルムキルが罪滅ぼしに決心したのが、愛するアイルランドを去り、スライゴでの戦いで自分のために命を落とした多くのピクト人(the Picts) に匹敵する数のピクト人にキリスト教を広め、キリストの恩寵に与らせることであった。対象は、スコットランド本土およびヘブリディーズ諸島 (Hebrides) に住むピクト人であった。彼がスコットランドを選んだもう一つの理由は、そこには聖職者として布教していた親戚がいたことである。彼は約10年のケルズ滞在の後、563年、アイルランドを去り、後にアイオナ島 (The Island of Iona) に修道院を創建した。彼はここを拠点として、さらにヘブリディーズ諸島を巡り、スコットランドのハイランド (Highland) 東部を統治していたピクト王国の王をはじめピクト人たちを改宗させ、これがスコットランド全土にキリスト教が広まる基となった。ところで、ピクト人 (the Picts) は、ブリテン島北部 (特にスコットランド) に住んでいた古代人で、スライゴで戦った聖コルムキル軍の兵士たちの多くがピクト人であった。聖コルムキルは、かつて自分が修行したクロナード修道院の12人の若い僧と共に、木の枠の上に動物の皮を張りつけただけの、アラン島の漁師が使っていた「カラハ」 (curragh) のような小舟で大西洋の荒波を一路北西を目指した。数時間の後、最初に到着したのは、アイオナ島ではなく、故郷アイルランドに近い別の島で、アイラ島であったともいわれている。彼がその島の丘に登って海上を見渡すと、故郷アイルランドの島影が肉眼でかすかに見えたことから、彼はもっと遠くに行かねばならないと決心した。そこで、アイルランドが見えないアイオナ島を目指したのである。彼の懺悔の気持ちがいかに強いものであったかがわかる。

聖コルムキルは574年頃アイルランドのデリー州 (Co Derry) のドラムケート (Drumceat) で開かれる宗教会議にどうしても出席しなければならない事態が起こり、その折、彼は祖国アイルランドが見えないように自ら目隠しをして到着し、さらに、自分の足裏がアイルランドの土を踏まないように靴の底にアイオナの土を敷いて上陸

したといわれる。彼がこの会議に出席した用向きというのはこうである。かつて、キリスト教が伝わる前のドルイド教の時代から、アイルランドには各地を巡る一群の人々、つまりバード (bard) といわれる吟遊詩人たちがいて、ケルトの伝統楽器ハーブを奏で、かつ歌って、町から町へ廻りながら人々を楽しませていた。ところが、厄介者だとしてこれらの吟遊詩人たちがこの国から追放される恐れが生じた。アイオナに居た聖コルムキルはこの事態を知って、目隠しをしてアイルランドに戻ってきた。そして、1200人の吟遊詩人を代弁して発言し、彼らを追放しないよう訴え、彼らに小さな土地を与えて支援すべきだとも言った。そのようなわけで詩人たちは大広間を行進しながらコルムキルのために歌い讃えたという話が残っている。聖コルムキルがここまでしたのは、一つには彼が音楽のたぐいをこよなく愛好していたからである。彼は朗々と響く歌声を持ち、讚美歌を歌う声は遠くからでも、「時には1000歩先でも」聞こえたという。ところで、聖コルムキルの弁護がどこまで功を奏したかははっきりしない。後述の通り、アイルランドのキリスト教化は、聖パトリックにより、多分に土着のドルイド教との折衷策によって成されたのだが、以後その反動として当然のことながらローマ・カトリックへの教化策が次第に強まってきた。この吟遊詩人追放もそうした政策の一つであったと考えられる。聖コルムキルをはじめ当時のケルト教会の修道士たちはドルイド時代の王族の血を引く者たちであった。彼はこの会議でドルイドの長のような役割を果たしたといえる。資料によると、おそらくこのような大会議においては、ドルイドが人々を治める統治者や宗教を司る神官としての特権を剥奪されたはずだということなので、一時的には吟遊詩人は追放されなくてすんだとしても、やがて次第に消えていく存在であったはずである。トリニティ・カレッジには吟遊詩人が用いた最古のハーブが所蔵されている。しかし吟遊詩人が持っていたのと同型は18世紀で途絶えたといわれる。それは、「最後の吟遊詩人」といわれるターロック・カロラン (Carolan, 1670-1730) の生涯に示されている。

聖コルムキルは、597年、76年の生涯をアイオナで終えた。彼は、「偉大な宣教師にて、詩人の聖者、アイルランドの守護聖人にして、懐郷の念抑えがたし旅人の守護聖人 (patron saint of homesick travelers)」として今なお崇められている。

聖コルムキルは、エグザイル (exile) として異郷にありながら、故郷アイルランドへの愛着を心ひそかに持ち続けたようである。アイルランドのノーベル賞詩人シェイマス・ヒーニー (Seamus Heaney) は、Gravities (重力) という詩を書いている。

GRAVITIES

重力

High-riding kites appear to range quite freely
Though reined by strings, strict and invisible.
The pigeon that deserts you suddenly
Is heading home, instinctively faithful.

高く舞い上がった凧は全く自由に泳いで
いるように見えるが
目に見えない糸でしっかり操られている。
突然あなたの足元から飛び立つ鳩は
本能的な忠実さでねぐらへと向かう。

Lovers with barrages of hot insult
Often cut off their nose to spite their face,
Endure a hopeless day, declare their guilt,
Re-enter the native port of their embrace.

熱い非難の乱射を交わしながら 恋人た
ちは
腹立ちまぎれに自分の損になることを言
い合い、
砂をかむような一日を送り、非を認め、
再び二人の抱擁の母港に帰る。

Blinding in Paris, for his party-piece
Joyce named the shops along O'Connell Street
And on Iona Columcille sought ease
By wearing Irish mould next to his feet.

パリで失明寸前のジョイスは仲間の前で
座興に
オコンネル通りのいろんな店の名をあげ
アイオナ島では聖コルムキルは足裏にア
イルランドの土をつけて安らぎを探し求
めた。

(Seamus Heaney: *Death of a Naturalist*, Faber and Faber, 1987, P.30)

目に見えない糸でしっかり操られて手許にもどる凧、本能的にねぐらに帰る鳩、熱い非難の乱射 (barrages) を交わしながら、白らの非を認め、再び抱擁の母港に帰る恋人たち。このような比喻を用いながら、アイルランドから離脱しながらその土への帰属にこだわり続けるアイルランド人の典型として二人が挙げられている。パリで失明寸前の作家ジョイス (James Joyce) は、仲間の前で座興に故郷ダブリン、オコンネル通りのいろんな店の名前を挙げた。ジョイスは生涯の大半をエグザイルとして大陸を流浪しながら作品はすべてダブリンを舞台に選んだ。大作『ユリシーズ』 (*Ulysses*) をは

はじめとする作品執筆のため、ダブリンの隅々にわたる地所の在りかや様子の詳細を弟スタニスラウス (Stanislaus) を通して得たといわれる。そして、ケルト修道院の父といわれる聖コルムキルは、6世紀異教の風が吹くヨーロッパ各地に修道院共同体が繁栄する礎を築いた。彼は、アイオナの修道院で着手され、やがて世界の注目を浴びるケルト四福音書彩色装飾写本『ケルズの書』の父といわれる。ヒーニーはこの詩の最後にこう書き記す。「アイオナ島で聖コルムキルは足裏にアイルランドの土をつけて安らぎを探し求めた」。上述のように、アイオナから一時アイルランドへ帰郷した時は、懺悔の思いで、アイルランドの土を踏まないように靴底にアイオナの土を敷いて上陸したのだが、アイルランドを離れる時は、ひそかにアイルランドの土を足裏に付けて異郷アイオナで安らぎを探し求めたわけである。まさに、patron saint of homesick travelers と称されるゆえんである。そして、「離脱」と「帰属」というアイルランド人独特の行動軌跡をジョイスと聖コルムキルは生涯にわたって描いたのである。

聖コルムキルは、597年、34年間アイオナ島での修行と布教の旅に勤しんだ後、76歳で永眠した。彼の死後、その遺志を受け継いだ弟子たちが、アイオナ島をヨーロッパのキリスト教文化の中核に押し上げた。アイオナは伝道と学問の殿堂としても君臨し、ヨーロッパ中から巡礼者や王族や貴族の子弟もここに集まった。この「伝道と学問の殿堂」という誉れ高き特質は、後に、806年頃、ヴァイキングの襲来を避けてアイオナからケルズに移動した聖コルムキルの弟子たちによって受け継がれ、ケルズ修道院が中核となって、アイルランドが「聖者と学者の地」(the land of saints and sages) と称される国に発展していくのである。このように、アイオナとケルズの間には、聖コルムキルの理念と遺志が息づく密接なつながりがある。作家ジェームズ・ジョイスは、'Ireland: Island of Saints and Sages' というエッセイの中で、聖コルムキルや聖コルンバーヌをはじめとする聖者や学者がスコットランドやヨーロッパ大陸に赴き、周縁の文化を普遍化し、また各国から伝道者や学者を引き寄せて「聖者と学者の地」という名誉ある称号を授かったアイルランドに生を受けた者として、自分は文学の分野でその伝統を受け継ぐことに誇りを持つ、と言っている。さて、アイオナからケルズに逃れる際に、聖コルムキルの弟子である修道士たちは、未完の写本『ケルズの書』や聖コルムキルの聖骨や遺品などを抱えて避難した。

ケルト美術の粹で四福音書彩色装飾写本『ケルズの書』(*The Book of Kells*)と『ダロウの書』(*The Book of Durrow*)についてであるが、前者『ケルズの書』は、聖コルムキル没後200年を記念して797年に写本制作が始まり、アイオナから持ち帰られた未完の写本をもとに9世紀初頭に完成した。聖コルムキルは聖書の筆写を好

み、また弟子たちに写本の作り方を指導し、聖書の写本作りという、この上なく重要な仕事に人生を捧げた人である。当然、『ケルズの書』の制作が始まった際には、彼が遺した写本の素材が応用されたはずである。一方、『ダロウの書』は、『ケルズの書』よりさかのぼる7世紀末、680年頃に制作された。聖コルムキル時代から100年余りが経過し、ダロウ修道院は繁栄の頂点にあつて、新しい豪華福音書写本の制作が待望されていたが、この修道院には聖コルムキルが聖パトリック (St Patrick) に捧げるために自ら12日間で書写した小福音書本が聖遺物として所蔵されており、これが、新しい豪華写本『ダロウの書』制作に応用されたのである。なお『ケルズの書』と『ダロウの書』は、ヘンリー・ジョーンズ (Henry Jones) によって、彼がミースの司教 (bishop of Meath) をしている間、つまり1661年から1682年の間にトリニティ・カレッジに寄贈された。『ケルズの書』は1661年、『ダロウの書』はそれ以後である。両書はトリニティ・カレッジ図書館のロング・ルーム (the Long Room) に保管されていたが、現在は下の階のコロネード (Colonnade, 柱廊) と呼ばれる部屋の中で、他の古書を集めた展示の中心にあるガラスケースに収められている。

3. 『ケルズの書』作成を可能にした条件

本章では、『ケルズの書』など福音書写本の制作を可能にしたのは何かを探索する。修道院の環境、聖コルムキルの写本への熱意と実績、それを受け継いだ弟子たちの忠節心等々を論考する。さらに、『ケルズの書』の特質を論ずる。

聖コルムキルがアイルランドを去る直接の原因となったコピー事件。友人聖フィニアンから借りてコピーした元の本は聖書、あるいは福音書写本ではなかったか？ 聖フィニアンがコルムキルのコピーを発見した時、その本とともにコピーは自分の修道院に帰属するものだと主張したのは、よほど修道院にとって無くてはならないもの、つまり聖書そのもの、あるいは同修道院の顔といってもいい福音書写本だったのではなかろうか。既述のように、ダロウ修道院が繁栄の頂点にあつた時、同修道院の新たな豪華福音書写本の制作が待望されて、完成したのが『ダロウの書』であつたように、聖コルムキルが借りた本は、聖フィニアンの修道院が最も誇る貴重な独自の福音書写本だったのではないか。単に聖書であれば、あれほどに帰属を主張しなかったのではないか。

ところで、聖コルムキルは、書物をこよなく愛し、異常なまでに執着したといわれる。例えば彼は本の管理に大変気を遣った。弟子たちが読んでいた本が水がいっぱいの水差しに落ちそうになったのを見て、「気を付けて！」と叫んだり、角 (つの) のイ

ンク入れがひっくり返りそうになり、ひやっとした、などの話がある。本は、柵に並べるのではなく、皮の袋に入れて壁に並んだ木の鉤（かぎ）に下げてあった。嵐の夜に強風が吹くと、その袋全体が風に揺れて音を立て、修道士たちが耳をそばだてたそうである。また、聖コルムキルが書き物に期待する水準は高く、写字生たちに細心の注意を払うよう促し、彼らの書いたものを全て見直して、必要な修正を施した。

聖コルムキルは裁定に敗れてアイルランドを去った。しかし、自分が原因で起こった戦いで多くの尊い人命が失われたことに対して自責の念にかられながらも、自分の手による福音書写本を創作する夢を抱いていたと考えられる。それには、まず自らの手で修道院を創建し、そこで宣教するための独自の福音書写本を創る必要があった。ただ、彼の抱く夢を単に野望だと片づけるのは早計であろう。彼が故郷を離れて異郷に赴いたのは、自責の念や修道院建築と福音書写本創作の夢のほか、一切を実現するための修道士としての確固たる使命感があったことを無視してはなるまい。

432年、ブリトン人の聖パトリックがアイルランドにはじめてキリスト教を布教した時、彼は土着のドルイド教を頭から否定せず、両宗教に共通する部分を巧みに取り入れながらキリスト教を広めていった。彼が伝えたのは、自然信仰的ドルイド教と習合しやすい東方キリスト教であった。このため、この布教においては世界ではじめて誰一人殉教者が出なかった。「赤の殉教」ならぬ「緑の殉教」が生まれたゆえんである。「緑」は聖パトリックを表し、彼が野に生える緑の三つ葉のクローバーを手にとって三位一体を説いた故事による。赤い血を流す死の殉教に匹敵する過酷な戒律の下、修道士たちは、修道院を中心にアイルランド西海岸沖のスケリグ・ヴィヒール島 (Skellig Michael) など孤島や森林に石造りの粗末な僧院を建てて住み、禁欲的な修行に励み、イエスの愛に報いるための自虐的な苦行にむしろ喜びを見出していた。これが「赤の殉教」に対する「緑の殉教」である。聖コルムキルほかアイルランドの聖者たちが故国を離れ、海を越えて異国に修道院を建設し、修行と布教活動に一生を賭けたのも「緑の殉教」そのものである。ダブリン生まれのカトリック神父がこんなことを言ったことがある。「アイルランド人はアイルランドが嫌いで出て行くのではありません。愛する母国を離れて異郷に生きる人生そのものが神に捧げる苦行なのです」。

第2に、福音書写本制作を可能にした環境について考えてみたい。聖コルムキルが所属したケルト教会はアイルランドで発展したもので、それは修道院を中心とするものであり、その制度を敷くのは西ヨーロッパの中で唯一アイルランドだけであった。このケルト教会の修道院制は、ローマ・カトリック教会が取り入れたヒエラルキー（位階制度）に基づく中央集権的な司教制とは明らかに対立するものであった。ケルト教

会では、教皇の至上権を認めず、司教ではなく修道院長が指導者であった。このように権威主義的なローマ・カトリックに比して、ケルト教会の修道院は、平等意識を基にした一種の生活共同体であった。このことは、古来大きな国家を構築せず、小さな王国を複数設けていたケルトの民族性と通じ合うものである。とにかく、このような環境だからこそ、「スクリプトリウム」(scriptorium, 修道院の写字室)で聖コルムキルの指導の下に写字生たちが写本に打ち込むことができたのである。聖コルムキルは温和な人柄で、自らの修道院の修道士たちを「家族」と呼び、父親のような存在で、大修道院長と呼ばれた通り、この共同体たるコミュニティの家長的リーダーであった。そして、この共同体を維持するための多くの建物が存在していた。野生の獣や賊の侵入を防ぐために土や石で築かれた壁に囲まれた敷地の中では、大所帯のコミュニティが暮らしていた。そして、ケルズ修道院は、その地域全体に様々な活動を促した。実際、修道院は、ほどなく一つの大きな町のようになり、農家、金細工師、鍛冶屋、熟練工たちが修道院の近くに移り住んだ。そして、子供たちは修道士が開く学校で学んだ。また、修道院内には来客用の施設もあり、巡礼や訪問者や旅の途中に立ち寄る人や貧しくて空腹をかかえた人々に食事や飲み物や寝所を提供した。聖コルムキルは「もてなし」が好きで、客人の足を洗い、心地よくしてやった。そして、自分はむき出しの岩のベッドで石を枕にして寝たといわれる。

また、聖コルムキルは「動物」を可愛がった。例えば、ある時、アイルランドからアイオナに疲労困憊の体でやってきた一羽の鶴をお気に入りのペットに加えて、その鶴を親身になって世話したという愛すべきエピソードが残っている。まさに、アイルランドからアイオナにかけて渡った自分の分身のようにこの鶴を可愛がったのであろう。また、牛の牧場と修道院を往復して牛乳を運んでいた「白馬」を聖人はこよなく愛していたといわれる。聖人が逝去する数日前、この白馬が彼に近づいてその胸に頭を押し付けたというエピソードが伝わっており、御主人が間もなく世を去ることを白馬は感知したのであろう。後述するように、『ケルズの書』や『ダロウの書』では様々な動物たちが躍動しているが、それらを福音書写本に取り入れた聖コルムキルと修道士たちにとって、人生は神に捧げたものであり、彼らが描いた活気ある様々な動物は、私たちに、修道士たちが神の創造物たる動物にすばらしい喜びを見出していたことを示している。さらに興味をひくのは、古アイルランド語から英語に訳されたある写字生による1000年以上前の詩である。彼は、筆写作業をする際、人懐こい白い猫を傍らに置いて、写し取りたい言葉を追い求める時に、猫が鼠を追う狩人の気分にひたる、というのである。俗界を断ち切った修道院の中での人間たる修道士と動物との親

しい交わりとそれから生まれる原始的想像力は、ローマ・カトリックでは許されざる、実現不可能な慣行であったであろう。修道士が自分と愛する白猫パンガー・バーンのことを語る詩をここに引用する。

パンガー・バーン

私と白猫パンガー・バーン
どちらも自分の仕事を持つ
猫は鼠を、そして私は
夜通し座して言葉を追う

人の賞賛から離れ
書物やペンと共にいることを私は好む
パンガーは私に何らの悪意を持たず
彼も又、自らの技をひたすら磨く

楽しきかな
私たちの仕事
共に部屋におり
心の愉しみを堪能する

勇敢なるパンガー・バーンの網に
鼠がかかる
私の鋭い思考の網が
言葉の意味を捕らえる

壁にじっと目を凝らす猫
大きく見開いた鋭く隙のない目
立ちほだかる知識の壁に
私のささやかな知恵が挑む

鼠が巣から走り出る時

パンガーの喜びはいかばかり
私の喜びは如何ばかりか
私の愛する謎を解明する時

静穏な心で生業に励み
私と白猫パンガー・バーン
匠の技に至福を見出し
各々自分の仕事を愛す

日々の弛まぬ努力ゆえ
パンガーの技は名人の域
私は日夜知恵を絞り
闇を光に変える

(ロビン・フラワーによる英訳より和訳。『ケルズの書を読み解く』 PP.12-13)

ここで、ケルト美術研究者である鶴岡真弓の言葉を引用しておく。「ローマの文化は、三角形の構図で例えれば、神というスーパーマンを頂点に戴き、その頂点あるいは中心に結集する文化である。一方、ケルトの文化は、それぞれ三角形の各辺、つまり、神の救いからほど遠い、女、子供、さらには「けもの」(beast) と差別される wild な存在までも含めて、底辺にうごめく各部分が同時的に活発に動くことによって、つまり各部分の連動によって全体が運動する文化である」。(鶴岡真弓、「CARA」第5号、ケルト会 in 九州発行、1998年、3&5頁) まさに、『ケルズの書』や『ダロウの書』において、「人間」、「鳥獣」、「植物」が組紐文様や渦巻き文様といったケルト文様によって互いに絡み合い、相手に侵食し、変容を促す、あの、見る者に眩暈を起こさせる世界が想起される。

『ケルズの書』にはいろいろな挿話があり、ラテン語の聖句を読むのが難しい人にとってキリストのメッセージを理解する助けとなる。挿話からは、鳥や馬、犬、猫、その他、様々な形や種類の魚まで、アイオナ島やその周辺にいたたくさんの生き物に対する聖コルムキルの愛情が感じられるとともに、難解な言葉につけられる注釈のかわりに、容易に忘れられない生き生きとした絵を通して福音書の深遠な内容が明快に伝わってくるのである。例えば、「種をまく人」の喩えには、雄鶏と雌鶏と若鶏が描か

れているが、こぼれ落ちた種を食べる鶏の姿を通してこの聖句の深遠な意味が伝わってくる。ジョークもあちこちに垣間見られる。例えば、No man（ラテン語のnemo）を意味する大文字のNが向き合う二人の人間で形作られており、体と足をねじらせて互いに絡みつき、Nの輪郭を作っている。二人は互いに相手の髭を引っ張り合っており、このNは、「どんな召し使いも二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」という有名な聖句（ルカによる福音書16章13節）の最初の文字である。このいがみ合う二人の人間の絵は、含蓄のあるイエスの言葉を味わう手がかりを与えてくれる。

『ケルズの書』における四福音書のラテン文字は、各福音書家が証言するゆるぎなき神の真実を示すものであり、不動のものである。一方、神の被造物である「人間」、「鳥獣」、「植物」は、神の意志、導きによって「変容」、「変質」を促される存在である。特に人間がそうである。ましてやケルト民族は伝統的に人間を世界の中心と見なかった。人間を描く場合にも、人間は手足頭をもった形の良い固体ではなく、様々な森羅万象の現象（「鳥獣」や「植物」を含む）とつながっているものであると見ていた。『ケルズの書』では、動物や植物が人間の周りを取り囲んで、人間の体の一部に侵食し、隙あらば変容を促そうとしているかのように見える。このように、ケルト人は、常に変容を繰り返すリズムと運動をもったものとして存在を認識した。存在を「成ったもの」として見るのではなく、「成りつつあるもの」として見ようとしたのである。『ケルズの書』の中で最も有名なのは、「キリストの誕生は次の如し」というマタイによる福音書第1章18節の聖句を装飾したイニシャル・ページであり、Christi (XPI) autem generatioを装飾したものである。C字やS字など円運動を起こす中心的な形がアンシャル文字というアイルランド独特の丸い文字と相調和して「変容」を促す運動のリズムを形成しており、動物や鳥や虫や人間を分節化せず、連鎖させていく力となっている。そして、XPIというキリストを表す文字は、全体の文様の中に溶け込んで周りの飾りと同化し、文字であることを忘れさせるようであるが、やはりXPIは光をあてられ（イルミネートされ）、浮かび上がり、不動の存在であることを示している。

4. 「変容」をくりかえす存在

ケルト人は文字を残さなかったので、神話とか民話とかいうものは口承で伝えられてきた。キリスト教が入ってきてラテン文字を通して文字というものが必要になってきて、聖書の写本をすると同時に、合間に、退屈しのぎのためということもあって、

神話とか民話を文字化した。したがって、キリスト教の写本と神話・民話の文字化とは同時進行で進んだと考えてよい。アイルランドのケルト神話の中にアルスター、今の北アイルランドを中心にした地方を舞台に、ク・ホリン (Cuchulainn) という英雄が立派な戦士になるという話がある。その修行の道中には、女神たちが動物に化けたりして、ク・ホリンの力を試したり、ある時は彼に恋をしながら、そして、断られて彼に復讐したりして、ク・ホリンをある意味では育てていく、あるいは彼に野生の力を備えさせていくという話がある。

ク・ホリンの物語の中で、アルスターで赤牛をめぐるコノハト (Connacht, かつてアイルランドは四つの王国にわかれ、これは今の西のゴールウェイを中心とした王国。タラの上王はこの四王国全体をたばねる地位にあった。) 軍との戦いがある。赤牛というのは元々は人間だったのが妖精から変化して赤牛になったわけであるが、コノハトのメイヴ (Medb) という女王がアルスターにいる赤牛が欲しくなって、アルスターとコノハトの間に争奪戦が起こり、ク・ホリンが戦うわけである。その時にク・ホリンがグロテスクな変貌を遂げる。彼はいろいろな女性を通してワイルドパワーを身につける。エマーという女性と結婚したかったけれども父親がどうしてもこれを許さなかった。父親はク・ホリンを試すために、「影の国」というところに行って力の強い女戦士と戦って勝ったら娘をやろうと言った。女戦士オイフェあるいはスカサハとの戦い、またその間に先述のメイヴ女王との赤牛を争奪する戦いがあったりする。あるいは戦いの女神であるモリグーとヴァハが寄り添うように、また試すように彼の道中で力をつけさせていく。メイヴ女王との戦いの中の一節に、ク・ホリンの「変容」がある。「彼の身体的全細胞は激流にほんろうされる水草のように震え始め、ふくらはぎが膨張し、腰と膝は後ろにひっこみ、首の筋肉は子供の頭大に固まり、片目は飛び出し、もう片方は額の奥に食い込む。口は耳元まで裂け、顎から羊の毛ほどもある泡が吹き出し、心臓は獅子の唸り声をあげ、光を発する頭、髪の毛は垣根の間に詰め込まれた赤いバラの枝のようにもつれあう」。何か『ケルズの書』における目まぐるしい変容を見ているようである。

『ケルズの書』の写本作業とケルティック・オデュッセイである古代アイルランドの航海譚と冒険物語の総称である「イムラヴァ」の文字化も同時進行で行われた。その代表的なものが『ブランの航海と冒険』である。ブランは、聖コルムキルがアイオナへの航海に使ったようなカラハという船で出発する。カラハというのは今でもゴールウェイの沖に浮かぶアラン諸島で漁師たちによって使われている古来からの船で、柳の木の枝を細工して編んで、それに獣の皮とかキャンバスを張って、コールタール

を塗っただけの大変軽いもので、四人の男がヒョイと担ぎ、海から上がると甲羅干しにされる。そのカラハに乗ってブランは常若（とこわか）の国に行く。そうするとリルの子マナナーンという国があり、そこで変身が起こる。海神リルの子マナナーンの国（至福の国）における変容は次のように起こる。「マナナーンとカンティヒルの間に生まれた子は蒼い海でも陸でも、あらゆる獣の姿になるであろう。攻めくるあまたの前で竜となり、あまねく大森林の狼となるだろう。二輪戦車（チャリオット）の駆け巡る陸地にあつて、彼は銀の角をつけた牡鹿となるだろう。水をたたえた澗（とろ）では斑（まだら）模様の鮭となり、海豹（あざらし）となり、純白の白馬となるだろう」。

ウィリアム・バトラー・イエイツ（William Butler Yeats）は、「文学におけるケルト的要素」（The Celtic Element in Literature）という論文を1897年に発表した。その中にケルト人の「変容する世界への夢」という箇所がある。「いかなる具象も滑らかに移り変わって他のどんな具象にもなりうる世界・・・この世界は、つと露の間を駆けすぎた兎が神様によって最初に創られた人間のお尻の上に座ったかもしれず、彼らの足に踏みにじられた燈心草（いぐさ）の束が、星群の間をほくそ笑む女神であったかもしれない世界、彼らがただちょっと魔法をかけると、そして手をかすかに波打たせ、唇をかすかに動かすと、彼らもまた燈心草の束になることのできる世界・・・・・・」という理想郷をケルト人は古来から心身を溶かしながら求めてきた。考えてみれば、アイルランドというのは珍しい国で、文明国家群の淵である西の果てにあつて、その土壤自体がやはりこういう夢の世界ではないかと思われる。文明の波が押し寄せてきているとはいえ、いまだに妖精信仰が根付き、妖精物語の語り部が存在する。

聖コルムキルは、当然のこととして『ブランの航海』を読んで、あるいはそれを自ら文字化したものを携えて、アイルランドからブランと同じようにカラハとおぼしき小舟に乗って異郷へ旅立ったのであろう。そして、彼の四福音書写本作成の構想の中には、『ブランの航海』におさめられたケルト伝来の「変容」を描写するエピソードが存在したとともに、彼の写本作業に必要な「変容」を促す絵模様が存在していたことであろう。

5. 聖コルムキルゆかりのケルズ修道院の全貌

アイルランド北東部ミース州に小さな町ケルズ（Kells）がある。この町を筆者はこれまで2回訪れている。最初は、2007年9月18日、梅光学院大学生涯学習プログラム「アルス梅光」における筆者の講座受講生23名を伴っての研修旅行において、

二度目は2013年2月20日のアイルランド個人研究旅行の際であった。もちろんお目当ては聖コルムキルゆかりのケルズ修道院 (The Monastery of Kells) であった。不思議なことに、ケルズとそこの修道院のことは、アイルランドに関する日本のどの旅行案内書にも載っていない。確かに海外への観光客の心を揺さぶるような壮大なパノラマも魅力的なギフト・ショップもここにはない。しかし、ここケルズは、6世紀以来ケルト・アイルランドおよび西ヨーロッパに修道院文化を広めた拠点なのである。年輪を重ねてきたケルト修道院のたたずまいに身を置くと、建物の構造や配置からも、聖コルムキルとその遺志を受け継いだ後継者や修道士たちの人間的思いやりの深さを感じざるを得ない。そのことを筆者が撮影した写真、また、Kells Heritage Centreによる A Trail Map を参考にして筆者が作成した道路地図も加えて説明したいと思う。

1. ケルズ (聖コルムキル) 修道院

ケルズ (Kells) は「大きな砦」を意味し、アイルランドの公認文化遺産継承地であり、この町にある修道院は、五つの古代巡礼道の交差点に位置していた。聖コルムキルが、553年頃この地に最初の修道院を創建した。古代王家の砦であったが、タラの上王 (High King of Tara) ダーモッド・マッカロル (Diarmuid MacCaroll) が550年頃聖コルムに授与した。聖コルムキルは約10年間ケルズ修道院に留まっていたが、スコットランドのピクト人 (the Picts) を改宗させるためにこの地を離れた。そして、スコットランド西部の島アイオナ (Iona) の修道院で四福音書装飾写本 (後に『ケルズの書』となる) 作成に着手するが、806年、ヴァイキングの来襲を避けるため、聖コルムキルの修道士たちは、未完の写本を携えてケルズ修道院に避難し、そこで9世紀初めこの写本が完成された。これが『ケルズの書』である。一時盗難に遭ったりしたが、現在はダブリンのトリニティ・カレッジ図書館に所蔵されている。ところで、修道院敷地内に植えられているイチイの木 (the yew trees) は重要で、最初はこの地を聖所として使っていたケルト人が悪魔祓いのために植え、その後、初期キリスト教徒たちによって、何千年もの寿命を保つこの木が植樹された。

2. ラウンド・タワー

10世紀に建てられたケルズ修道院のラウンド・タワー (Round Tower) は、鐘塔、見張り用として、また、外敵からの避難場所として用いられた。また、巡礼たちや行き倒れの人や食べ物を求める人たちを迎える道しるべとしても用いられた。このタワーには最上部に五つの窓が取り付けられており、通常は四つであるから特殊なものである。その理由は、アイルランドの主要な町へ通じる古代からの五つの道を見通すためである。その道は、①キャリック通り (Carrick St, キャヴァンへ)、②キャノン通り (Canon St, オールド・キャッスルへ)、③モードリン通り (Maudlin St, アルディー & ダンドークへ)、④ファレル通り (Farrell St, マリンガーへ)、⑤ジョン通り & ナヴァン通り (John St & Navan Rd, ナヴァン、ダブリンへ) であり、五つの町へ通じている。この五つの道があるため、ケルズ修道院には五つの9世紀建造のハイ・クロスがあって、それぞれが、五つの道へ導く「門」(gate) の役割を果たしていた。つまり、巡礼や旅人が修道院に入ったり出たりする目印であった。しかし、後にこの五つのハイ・クロスは修道院の敷地内あるいはその周辺に移動された。その理由は、1152年、この教会がケルズの宗務院 (the Synod of Kells) となったためである。これは、ケルズのケルト的キリスト教会をローマ・カトリック教会体制に合わせるためであった。宗務院というのは、カトリックの伝統に従い、宗教の教義、儀式などの調査・研究および各教会の指導をする官吏を置く機関であった。5番目の十字架は、東門の外にある町のマーケット地区に移動され、「マーケット・クロス」(The Market Cross) と称される。

(後に上記「ケルズ (聖コルムキル) 修道院と同教会」と「ラウンド・タワー」を含む写真が数枚載せられているが、その最後に、ケルト修道院敷地を中心に、そこから延びている5つの道を示す道路地図が載せてあり、そこに、それぞれ上記①～⑤の道の番号、それから通じる町の名が記されている。)

3. 五つのハイ・クロス (十字架)

The Unfinished Cross (未完の十字架)

ヴァイキングが職工を連れ去ったため未完成となった。

The Broken Cross (壊れた十字架)

シャフトの長さから、これは各地のケルト十字架の中で最も高いものだったと言われている。この十字架は、クロムウエル軍がこの修道院を厩（うまや）として用いた時に壊されたと推測されている。

The Cross of Kells (ケルズの十字架)

The Tower Cross (タワー・クロス) とも呼ばれる。タワーの傍、尖塔付きの「コルムキル修道院」(6世紀以後尖塔にいたるまで上方へ付加されていった)との間に建っている。これは大変珍しいもので、二人の聖人パトリックとコルムキルに献呈されたものであり、そのことは基石の表面に刻まれている。組紐文様の上部に「アダムとイヴ」「カインとアベル」の説話が彫られている。

The Market Cross (マーケット・クロス)

現在はナヴァン (Navan) 通りとスレイン (Slane) 通りの交差点にある「旧裁判所」(the Old Courthouse) で現「ヘリテイジ・センター」(Heritage Centre) の外側に建っている。9世紀建造のこの十字架は、元々ケルズ修道院の東門に建っていた。それは、迫害から逃れてきた者が、いったん修道院内に逃げ込めば身の安全を保障してもらえることを意味していた。十字架の頂上部が壊れているのは、やはり17世紀のクロムウエル軍の攻撃によるものである。この十字架は、1798年の蜂起を起こしたクロッピーズ (Croppies) の絞首刑に用いられたらしい。クロッピーズあるいはクロッピー・ボーイズ (Croppie Boys) という名は、彼らが農民であったこと、また、当時流行のフランス式にあやかかって短く刈り込んだ髪型を採り入れていたからである。十字架の中心に「磔刑 (たっけい)」、シャフトの最下段に「墓の中のキリスト」、基台には異教の神話から「騎馬の戦士たち」が彫られている。この戦いのシーンは、ハイクロス芸術ではめったに使用されない題材である。この十字架の基石は、1893年、ケルズのジェイムズ・オフエラリー (James O'Ferrallie) によって建立されたと基石の上に彫られている。

The Base of The Fifth Cross (五番目のクロスのベース)

消滅して長年経っている。これもクロムウエル軍による破壊の結果だとされる。この基石は、「聖コルムキル修道院」の西側隅にある。基石に残る複数のへこみ跡は大砲の弾丸跡と想像されている。

(以上の十字架の筆者撮影による写真は、最後の The Base of The Fifth Cross を除いて後のページにまとめてあり、それぞれの修道院内での位置は、最後の地図に矢印で示されている。)

4. 聖コルムキルの家 (St. Columcille's House)

ケルズ修道院の敷地から北側にある。建立は9世紀にさかのぼり、9世紀の石造りの教会あるいは小礼拝堂の典型である。小さい、傾斜の急な屋根を持った石造りの祈祷室の形を成しており、グレンダロッホ (Glendalough) における聖ケヴィン (St. Kevin) のキッチンに似ている。ここには聖コルムキルの遺品があったはずであり、屋根裏には三つの部屋があり、そこは写本作業をしたり、書籍を保管したりするために使われていたはずである。東の壁に小さな窓と入口がある。伝説によると、地下に通路があり、ケルズ修道院に通じていたと言われている。『ケルズの書』に描かれた「キリストの誘惑」は、悪魔による三回目の誘惑を示している。この中で、「コルムキルの家」の形が描かれており、この家で『ケルズの書』が書かれたことを証明している。

(この「聖コルムキルの家」の筆者撮影による写真は、後のページに「ケルズ修道院」および「聖コルムキル教会」と「ラウンド・タワー」、そしてハイ・クロス群の写真と共に載せてあり、それぞれの修道院内での位置は、最後の地図に矢印で示されている。)

6. おわりに

『ケルズの書』における文字と文様の交錯についてあらためて考えてみる。ケルト人は長く文字を持たなかったといわれるが、ローマとの交易を通してアルファベットは知っていたとされる。しかし、ケルト人の支配層であるドルイドは、部族に伝わる歴史や物語や秘伝を守るために、文字の使用を禁止していた。その代わりに、それらを暗記させ、語らせる方法が採られていた。物語を語り、歌う吟遊詩人 (bard, バード) がその代表である。だが、彼らは厄介者として追放の憂き目にあうところを聖コルムキルがアイオナ島からアイルランドに帰って、詩人たちの代弁をして追放しないように訴えたことはすでに述べた通りである。当時の時流は、文字使用の先駆者であ

るギリシャ・ローマおよびローマ・カトリックの勢力拡大に向かっていた。吟遊詩人追放はそれを物語っている。

ケルト人は物語などを文字を使用せずに記憶に頼って再現するわけだから、時によって少しずつ変化したであろうし、むしろ効果を狙って意識的にそうしたであろう。それは、後に偉大な文学者や音楽家を生み出す原動力となる創造性と想像力を育てたことであろう。音楽を例にとると、互いに練習しないで、音符も見ないで、複数の奏者たちがパブに集まって見事に調和のとれたセッションをやっている。そういう、いわば即興性のため、演奏の度に異なる創造性が発揮される。2013年11月9日、11年ぶりに来日した元ビートルズの一人でアイルランド人の血を引くポール・マッカートニーが、取材に際して、「自分は音符を読めない。ただ、共通のリズムが身についている」と語った。

ケルト音楽の特長は、強烈なアイデンティティ、民族の誇りを持った音楽であると同時に、散っていった移民先の音楽と融合する自由さである。アメリカに移民したアイルランド人は、自国から持ち込んだトラッド・ミュージックを土着の音楽と融合させてカントリー・ミュージックを作り出し、さらに西アフリカからの黒人奴隷の音楽ブルースと合体させてロックンロールを生み出した。それが巡り巡って、イギリスのリバプールに居た音楽好きのアイルランド移民の子供たちに伝わって、ビートルズの音楽を世に送り出すもとなつた。さらに、アイルランドの伝統音楽演奏の大御所であるチーフタンズ (The Chieftans) は、ガリシア (Galicia, ヨーロッパ中東部で、かつてのケルト居住地区) のパイプ楽器を交えた音楽を、ガリシア移民が移住したメキシコ、カリブ、キューバにまで足を延ばし、その地の伝統音楽と異種交配させた。出来上がったのは、「サンティアゴ」 (Santiago) という曲であった。ケルト人は何百年もかけてヨーロッパ大陸で移動を重ねていた。たまたま住み着いた場所に適応していくうちに、多様性を認める、絶対的な価値などないということを学び取った。2013年9月にBSフジで、シリーズ番組「旅する音楽」の二回目が放送され、ジプシー集団であるロマニー (Romany) 族が、伝統音楽を維持しながら旅先の音楽と融合させていく姿を追ったもので、第3回はアイルランドの特集である。

ケルト人は、文化の現在性を重視し、文字というものが文化の複製性 (コピー) を促し、言葉がはらむ運動的で多様な力を殺すという観念から、文字の使用を長い間ためらった。その代わりに、声、音による伝達を重視するとともに、『ケルズの書』に顕著な連続的で運動的な渦巻き文様、組紐文様、巴文様等々、装飾文様による表象作業を独自の表現形態とした。これは、ローマ的な古典彫刻や美術が、「成った (完成した)

もの」の形の美を表しているのに対して、ケルト文様はひたすら「成りつつある（プロセスにある）もの」の美を表そうとしていることを示し、宇宙に存在するすべてのモノ（人、動植物を含む）をそのような存在と見なしたことを物語っている。それは、既述のように、アイルランド伝統の「変身の神話」に通じる。

『ケルズの書』をあらためて見直すと、イエスの聖なる生涯を証言する福音書家の言葉を示すラテン文字は、「すでに成った、不動の存在」としてイルミネートされながらも、その文字を連続的なケルト文様によって繋げられた「いまだ成りつつある」存在群が蠢きながら「変容」を促しているという印象がますます強くなってくる。



左は聖コロンバ（コルムキル）修道院（6世紀以降）、
右はその教会（18世紀）



ラウンド・タワー



未完の十字架



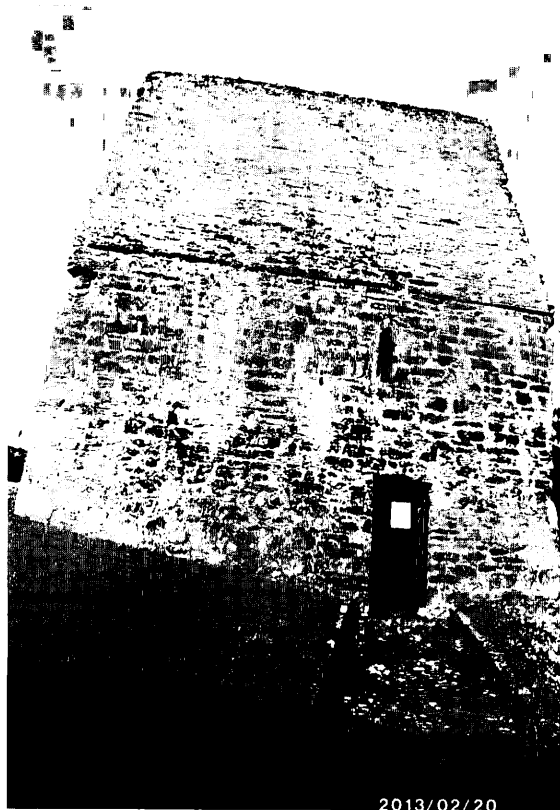
壊れた十字架



ケルズの十字架



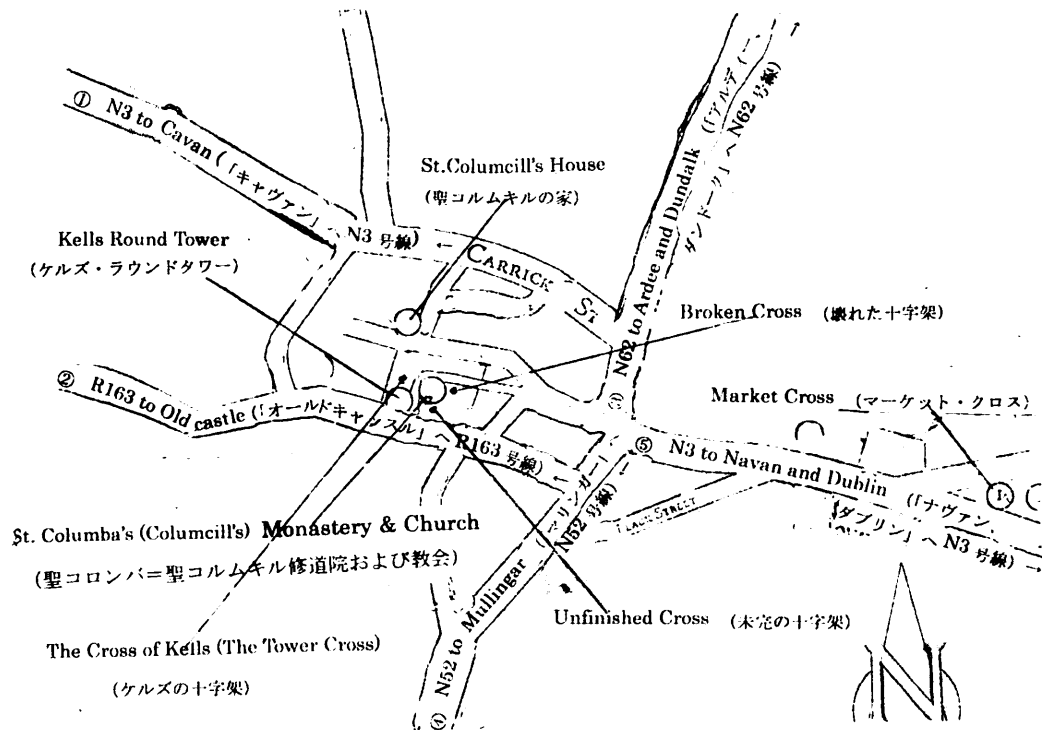
マーケット・クロス



聖コルムキルの家

ケルズ修道院を中心にのびる5つの道

①～⑤ およびハイ・クロス他



引用&参考文献

1. *A Guide for Kells*, Kells Tourist Office, 2013.
2. *A Trail Map*, Kells Heritage Centre, 2013.
3. CARA 第2号、ケルト会 in 九州、1996.
4. CARA 第5号、ケルト会 in 九州、1998.
5. 深谷哲夫、リチャード・ホートン、月川和雄著『アイルランドへ行きたい』、新潮社、1994.
6. Heaney, Seamus: *Death of a Naturalist*, Faber and Faber, 1987.
7. Joyce, James: *Occasional. Critical and Political Writing*, Oxford Univ. Press, 2000.
8. Meehan, Bernard: *The Book of Kells*, Thames & Hudson, 1994.
9. ミーハン、バーナード著、鶴岡真弓訳『ケルズの書』、創元社、2006.
10. ミスター・パートナー出版部著・発行『ミステリアス ケルトの本 ～ ケルト入門書』、1998.
11. 尾島庄太郎著『イエイツ・人と作品』、研究社、1969.

12. シクズ、ジョージ・ホト著、雨宮照美訳『ケルズの書を読み解く』、The O'Brien Press, Dublin, 2012.
13. シャーキー、ジョン著、鶴岡真弓訳『ミステリアス・ケルト—薄明のヨーロッパ』、平凡社、1992.
14. 武部好伸著『スコットランド「ケルト」紀行』、彩流社、1999.
15. 武部好伸著『アイルランド「ケルト」紀行』、彩流社、2008.
16. 武部好伸著『ヨーロッパ「ケルト」紀行』、彩流社、2010.
17. The facsimile edition of *The Book of Kells*, and its accompanying volume of commentary, Faksimile Verlag, Lucerne, Switzerland, 1990.
18. 鶴岡真弓・松村一男著『図説/ケルトの歴史』、河出書房新社、2004.
19. 鶴岡真弓著『ケルト/装飾的思考』、筑摩書房、1994.
20. 上野 格著『図説/アイルランド』、河出書房新社、2010.
21. Yeats, William Butler: *Essays*, Macmillan, London, 1924.